＜小学校音楽部会＞

研究主題

「音楽活動の基礎的な能力を培い、児童一人一人が成就感や感動を実感できる個に応じた指導に関する研究」

研究の概要

本研究は、音楽科における個に応じた指導の在り方についての開発研究である。その目指すところは、個に応じた指導を工夫した授業によって、音楽活動の基礎的な能力を培うとともに、すべての児童に音楽活動の喜びを味わわせることである。

Ⅰ　研究の目的

本研究は、昨年度の成果を踏まえ、児童一人一人の感じ方や考え方を生かすとともに、音楽科の基礎的・基本的な内容の確実な定着を目指す、個に応じた指導の在り方について研究開発を進めるものである。

研究に当たっては音楽科の学習の特性を十分に踏まえ、情意面と能力面のバランス及び、集団での学習における個に応じた指導の２点にも留意した。

Ⅱ　研究の方法

１　目指す児童像

個に応じた指導を重視することは、一人一人の児童が何をどのように学んでいるのかという「個の学び」に着目し、その深まりを目指した授業を展開することである。このような授業において目指すのは、「自らの感じ方や考え方を生かして、主体的に音楽活動に取り組み、成就感や感動を実感する児童像」である。

このような児童像に迫るための授業を次のように構想した。

２　個に応じた指導の授業の構想

授業を構想するには、まず、児童の学習状況や個性等を把握することが大切である。児童一人一人には、生活経験に基づくものも含め、様々な個性があり、興味・関心、感じ方や考え方、そして問題解決の仕方などに違いがある。個々の状況に応じた適切な指導を行っていくようにする。

次に、児童が主体的に学習をするようにすることが大切である。児童が自ら課題を見付け、自分の感じ方や考え方を生かして課題を解決していくようにする。このような主体的な学習においてこそ、児童は自らの考えに基づいて個の学びを深めることができる。その児童なりの課題解決への道筋を支援するのが教師の役割であり、個に応じた指導であるととらえた。

そこで、個に応じた指導を「児童一人一人の題材の目標に至る多様な道筋を大切にし、その感じ方や考え方を生かした主体的な学習を支援すること」であると考えた。

また、個に応じた指導の授業構想具体化の手だてとして、「自ら課題をもつようにする工夫」「学習形態や学習コースの工夫」「学習状況の把握と評価の工夫」の３点を掲げ、研究を進めることにした。

Ⅲ　研究の内容

1　自ら課題をもつようにする工夫

個の学びを実現させるには、題材の目標を児童が自分の課題としてとらえ、主体的に音楽活動を行っていくことが大切である。同時に、教師が、その活動でどのような力を児童に身に付けるようにしたいのかをはっきりもち、児童に課題をもたせるような発問の工夫や児童の実態に応じた楽曲の編曲、鑑賞音源の選択等をすることが必要である。

(1)　児童が楽曲に関心をもち、気分を感じ取って聴くための発問の工夫

児童の音楽との出会いを大切にし、自分なりの感じ方で音楽をとらえられるようにすることは、一人一人の感じ方や考え方を生かし、引き出す上で大切である。そのために、

① 楽曲を聴く前の、作曲者やその出身、演奏楽器等児童が関心をもつような発問

② 曲を聴いた後の、気付いたことや楽曲を聴いた時の気分、思い浮かべた様子等感じ取ったことを引き出すような発問を工夫した。表１は、教師の発問と児童の様子、及び個に応じた支援としての教師の働きかけについて考えたものである。

表１　T「ようすを思い浮かべながら聴きましょう」「この曲を聴いてどんな気持ちがしましたか？」

児童の様子（学習活動）	・気持ちや情景を思い浮かべている・自分の感じ取ったことを表現する ・どうしてそう感じたのか理由を言う。 ・感じ取ったことを音楽の構成要素と結び付けている。
教師の働きかけ（指導　支援　助言）	・好き、ふつう、そうでもないなど楽曲の第一印象を素直に表してよいことを伝える。 ・好きなフレーズを見付けるように助言する。 ・友達の意見を聞いて、自分に合う感じ方を見付けるように助言する。

(2)　児童が具体的な願いやめあてをもち、それに向かって活動するための手だての工夫

児童が音楽を聴いて感じ取ったことをもとに、音楽活動への願いやめあてをもつようにするために、教師は効果的なＣＤを選択したり、比較しやすいような範奏をしたりすることが大切である。表２は、教師の発問と児童の様子、そして児童が願いやめあてに向けて具体的な学習活動に取り組む際の、教師の働きかけについて考えたものである。

表２　T「どんなふうに演奏したいですか？」「自分のやることが決まったかな？」

児童の様子（学習活動）	・自分もやってみたいという願いをもつ。・自分ならこうするという願いをもつ。 ・やり方がわかる。・いろいろな方法で試している。 ・もっとよくするにはどうしたらいいか考えたり試したりしている。 ・友達と聴き合っている。・友達と合わせて演奏している。
教師の働きかけ（指導、支援、助言）	・ゆっくり演奏するように助言する。・気に入ったフレーズから演奏してもよいことを伝える。・学習カード（ヒントカード等）を見るように助言する。・教師がもう一度演奏し、表現の工夫に気付くように支援する。・友達の演奏の表現の工夫に気付くように支援する。・表現の工夫について説明する。・教師が一緒に演奏する。 ・教師の演奏を模倣するように助言する。

2　学習形態や学習コースの工夫

学習過程において、一斉、グループ、ペア、個別など様々な形態をねらいによって効果的に組み合わせたり、コース別学習などのように学習の方法が選択できるようにしたりすることは「個に応じた指導」として有効な手だてであると考えた。

(1)　学習形態の工夫

個人の能力や関心などを把握し、児童一人一人のよりよい学びを実現させるためには、学習の展開に合わせて最もふさわしい学習形態を選択することが望ましい。一斉指導の中では、リレーによる表現や一人の表現の聴き合いによって、個の発揮や把握の場、そして学び合いの場を設けることができる。また、個別学習では児童一人一人の興味、関心、課題に応じた学習を展開することができる。さらに学習の速度や能力、課題への意欲などの個人差を配慮した手だてとして、聴き合える場や教え合うコーナーの設定、一斉の形に戻しての学び合いの場の設定といった工夫が有効である。

(2)　学習コースの工夫

本研究においては学習コースというものを単なるコース設定だけではなく、児童一人一人が自分の感じ方、考え方を生かして、自分なりの学び方で学習を進めていくことができる道筋と考えた。楽器や楽曲の選択、又はソロやペアの選択などのコース設定（指導事例１）のほかにも、児童の実態に柔軟に対応した様々な学習方法の提示（指導事例２）を考えた。こうした学習コースの設定にあたっては、学習の進め方や方法などを具体的に提示することが重要となる。

3　学習状況の把握と評価の工夫

「個に応じた指導」を深めていくには、学習過程に沿った個々の児童の学習状況を適切に把握することが不可欠である。適時適切な指導と評価を一体化させて行うことによって、個の学びは質的に高まっていくと考える。

(1)　学習カードの活用

学習カードを活用することにより、児童が活動を振り返ったり学習過程の中で身に付けたことやつまずいたことを確認したりすることができる。また、教師はそこに書かれた児童の意見や感想から、児童が集団での学び合いの中で得た学習の成果を知ることができる。さらに、児童は教師との学習カードのやりとりから新たな課題に気付くこともできる。

(2)　自己評価・相互評価の工夫

児童が、学習過程の中で自己評価や相互評価をする場面は、表現活動と一体となって常に行われている。大事なことは観点を明確にしておくことである。児童が集団での学び合いの中で自己の新たな課題を発見し、意欲をもって取り組むことができるように学習環境を整え、評価の言葉にも配慮していくことが大切である。

(3)　評価を伝える言葉

教師の評価の言葉はそのまま児童の自己評価、相互評価の規準となる。教師は評価を伝える言葉を見直し、整理して使うことで、児童の学習意欲の励みや向上につなげたい。観点を明らかにし、評価規準に合った言葉を選んで児童に伝えていくことも大切である。

指導事例（1）

1　**題材名**　きれいな音で演奏しよう（第４学年）

2　**研究主題との関連**

児童はリコーダー演奏の習得場面一つをとってみても、その方法、速さ、学び方などは一人一人違う。また、楽曲の感じ方や音楽に寄せる思いも十人十色である。本事例は、音色や旋律の美しさを感じながら、楽器を演奏する学習における個に応じた指導についての実践である。

この題材において児童は、新しく学習する上二点ホ音・上二点ヘ音とともに、「オーラ リー」という曲に出会う。「演奏したい」（願い）→「練習して吹けるようになった」（自信）→「他の楽器でも演奏してみたい」、このような自然な学習意欲の高まりを考慮して題材の指導計画を考えた。学習の過程でリコーダーの美しい音色を求めて練習に取り組む姿、自分のやってみたい演奏形態を選んで思いを実現させていく姿が発揮されることを目指した。

６時間扱いとし、第２次までに主旋律をリコーダーで表現できるように学習した後、第３次ではその表現をさらに楽しみたい児童、副次的な旋律を合わせて友達と一緒に演奏したい児童など、感じ方に合わせて表現方法に幅を持たせる活動の場を設定した。第２次では技能面の習熟における個に応じた指導の在り方、第３次では一人一人の興味・関心や感じ方を生かした活動における個に応じた指導を目指した。

3　**題材の目標**

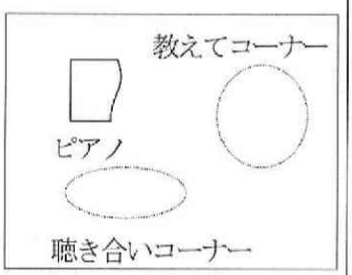
ア　楽器の音色のよさを感じて演奏を楽しむ。

イ　旋律の特徴や楽器の音色のよさを生かして演奏する。

4　**題材の評価規準**

	ア音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	自分なりの思いや願いをもって演奏に意欲的に取り組んでいる。	音色のよさや美しさを感じ取るとともに、曲想を生かして表現を工夫している。	楽器の演奏の仕方や音色に気を付けて表現している。	楽器の音色の特徴や曲想を感じ取って演奏を聴いている。
学習活動における具体の評価規準	①楽曲に対するイメージをもって練習に取り組んでいる。 ②自分で方法を選んで「オーラ リー」を演奏している。	①楽器の音色や旋律の特徴を感じ取って演奏を工夫している。	①サミング奏法を理解して正しく演奏している。 ②音色に気を付けてリコーダーを演奏している。	①楽器の音色の特徴と曲想を感じながら友達の演奏を味わって聴いている。

5　指導計画（６時間）

時	○学習内容　・学習活動	☆個に応じた指導　◇教師のかかわり　◆評価
【第１次】サミングを使った奏法を知る。		
1	○高いミ・ファの出し方を知る。 ・教師のリコーダー奏で高いミの音を聴く。 →何の音か当てる。 →同じ音を出す。	◇クイズ形式にすることで興味や意欲をもちやすくするとともに、工夫したり考えたりして音を探っていく。〈発問の工夫〉 ◇親指の使い方や息の吹き込み方について、図や実演を使って説明する。 ☆個人練習　☆教え合いコーナー　☆学習カード　◆ウ① ・思うように音が出ない → 指穴を教師が押さえて児童が吹き、音の出る感覚を味わうとともに原因を考えるようにする。
【第２次】旋律の特徴を感じて「オーラ リー」を演奏する。		
2 3	○「オーラ リー」を聴いて、イメージをもつ。 ・教師の演奏を聴く。 ○旋律の特徴を生かしてリコーダーを演奏する。 ・歌詞唱をする。 ・階名唱をする。 ・リコーダーを練習する。  	◇景色や色などを想像しながら聴くように言葉をかける。 ☆学習カード　一人一人がもったイメージや印象を書く。 〈教材提示と発問の工夫〉 ◇既習の学習が生かせることを知らせ、リコーダー奏への意欲をもつようにする。 ☆レベルアップポイント　☆教えてコーナー〈学習状況に応じた手だて〉 ・演奏できた →なめらかにつなげて、もっときれいに等、次のめあてを考えるように ・リズムがうまく演奏できない → 一緒に歌いながら演奏してみる。 ・4段目が難しい →部分的に練習するよう促す。 ☆聴き合いコーナー　〈学び合いの場〉 ・友達同士で聴き合って、感想やアドバイスを交流する。 ◇学習カードに書かれた「曲の感じ」を生かして表現するように声をかける。 ☆学習カード　〈相互評価〉 ・友達に簡単な感想を書いてもらう。　◆ア①　イ①　ウ②
【第３次】楽器の音色のよさを生かして演奏を楽しむ。		
4 5	○楽器の音色を生かして演奏する。 ・下のパートや他の楽器での範奏を聴く。 ・コースを選んで練習する。	☆学習カード　〈感じ方や考え方の把握〉 ・自分の演奏してみたい方法を自由に書く。 〈一人一人の思いや願いを生かした手だて〉 ソロコース リコーダー独奏で主旋律を演奏 ・前時までの学習をさらに深める デュエットコース 友達と音と合わせて演奏 ・リコーダー二重奏 ・リコーダー(上)とグロッケン(下) ・リコーダー(上)と木琴(下) ◆ア②　イ②
6	○友達の演奏を楽しむ。 ・発表し、聴き合う。	☆学習カード　〈相互評価〉 ・友達の演奏を聴いて感想を書く。　◆　エ①

6　考察

(1)　児童が自ら課題をもつようにする工夫

ア　サミング奏法の学習への導入

初めて学習するサミング奏法について、児童の実態を考え、より興味・関心をもって取り組めるよう「何の音かな？」「同じ音を出してみよう」という投げかけをした。その結果、違う音を出している友達にも励ましの言葉をかけ、一人一人が試行錯誤をしながら意欲的に取り組む姿が見られた。

イ　演奏したいという意欲をもたせるための教材提示《音楽との出会い》

楽曲へのあこがれや思いは演奏への意欲となることが多い。「オーラ リー」のリコーダー奏を聴いて景色や物語を想像する学習では、児童が水の精が笛を吹いている様子や、前半と後半で違う色を思い浮かべていた。このような内容を学習カードに書くことで自分のイメージやめあてを確認しながら活動することができた。教材の選択とその魅力を引き出すための工夫が大切である。

(2)　学習形態や学習コースの工夫

ア　学習状況に応じた手だて

音探しや練習の場面は個別学習とし、一人一人が自分と向き合って活動できるようにした。第２次のリコーダー演奏では、階名を一つ一つ確認したり、感覚的に音を探して吹いたり、児童によって演奏を仕上げていく方法や習熟の速さは様々である。そこで、つまずきを解消する「教えてコーナー」や、すぐに演奏できてしまった場合の「レベルアップポイント」をという手だてを考えた。その結果、児童は自分のペースでじっくり取り組んだり、「もっと音をつなげて」等、次のめあてを考えて練習したりしていた。

イ　児童一人一人の思いや願いを生かしたコース設定

第３次ではリコーダーでの「ソロコース」、リコーダーの他に木琴、グロッケンで下のパートを付けて二重奏にする「デュエットコース」を設けた。児童は、やってみたい楽器や、よりイメージに合う楽器で演奏に取り組み、キラキラした水の感じをグロッケンで表したり、リコーダー奏で下パートに挑戦したり、自分の願いを実現しようとしていた。

ウ　学び合いの場の設定

自分で納得して演奏できるようになった児童には、お互いに聴き合う場面を設定した。また、個別練習の場面でも早く演奏できるようになった児童がつまずいている児童に教えたり、一緒に演奏したりしていた。これは大切な学び合いの場面であるといえる。

(3)　学習状況の把握と評価の工夫

ア　音楽を聴いて感じたことを表す学習カードによる評価

曲に対するイメージを学習カードに書くことによって、教師は児童一人一人の感じ方を把握し、指導の手だてとすることができた。

イ　自己評価・相互評価のための場の設定と学習カード

友達のサインや感想の欄を学習カードに設け、互いの演奏を聴き合う場を設定した。相互評価をすることによって児童は自らの学びに気付くことができた。

指導事例（2）

1　題材名　わらべうたで楽しもう（第３学年）

2　研究主題との関連

本事例は、音楽をつくって表現する活動における個に応じた指導の実践である。わらべうたは、子どもの遊びの中で伝承されてきた音楽であり、児童に親しみやすい。また、歌遊びをしながら拍感、リズム感、音高感を楽しく身に付けることができる。五音音階を使ってわらべうた風のふしができることは、初めてふしづくりする児童にとって取り組みやすいと考えた。ふしづくりの過程では、児童一人一人の学び方によって、それぞれ違った手だてを考え、つくる喜びや楽しさを味わわせたい。

3　題材の目標

ア　聴いたり歌ったりして、わらべうたの旋律に親しむ。

イ　ミ・ソ・ラ・シの音を使ってわらべうた風のふしづくりをする。

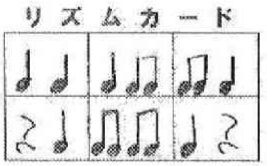
ウ　拍の流れにのり、つくったふしを演奏して楽しむ。

4　題材の評価規準

	ア音楽への関心・意欲・態度	イ　音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	わらべうたに親しみ、ふしづくりを楽しんでいる。	わらべうたの特徴を感じ取って、ふしづくりを工夫している。	簡単なふしをつくり、拍の流れにのって演奏することができる。	わらべうたの特徴を感じ取ったり、友だちの表現のよさに気づいたりしながら聴いている。
学習活動における具体の評価規準	①友だちと楽しく歌ったり、身体表現したりしている。 ②ふしづくりに関心をもち、何度も試しながら活動に取り組んでいる。	①ふしの特徴を感じ取りながら、ふしづくりを工夫している。	①拍の流れにのってつくったふしを演奏している。	①わらべうたの特徴を感じ取りながら聴いている。 ②友だちの表現のよさに気付いて聴いている。

5　指導計画

	○学習内容　・学習活動	☆個に応じた指導　◇手だて　◆評価
【第１次】わらべうたを聴いたり歌ったりして、旋律に親しむ。		
1	○わらべうたに親しむ。 ・メドレーを聴く。 ・歌ったり遊んだりする。	◇拍の流れにのって、わらべうたを歌ったり遊んだりするようにする。 ◆（エ）①（ア）①
【第２次】ミ・ソ・ラ・シの音を使ってわらべうた風のふしづくりをする。		
2	○８拍のふしづくりをする。 ・リズム打ちをする。 ・簡単な８拍（四分音符７拍）のふしを木琴でつくる。 ・つくったふしを聴き合う。	☆学習カード①〈学習過程の工夫〉 ・音をどうはめてよいかわからない。→　教師が１音か２音でつくったふしを例示する。 ◇ふしはミかラで始まり、ラで終わるようにする。 ◆（ア）② ◇何人かのふしを木琴で発表するようにする。 ◇拍の流れにのって演奏できるように、木琴の伴奏で合わせるようにする。

3・4	○８拍のリズムづくりをする。 ・リズムカードをつかって自分のリズムをつくる。 ・つくったリズムを学習カード②に書いたり、手拍子で打ったりする。  ○ミ・ソ・ラ・シの４音を使い、ふしづくりをする。 ・自分のつくったリズムに音をあてはめてふしづくりをする。 ・学習カード②につくったふしを書く。 ・つくったふしをお互いに聴き合い、自分のふしづくりに生かす。	◇リズムカードを用意し、つくり方を例示する。 ◇リズムは、２時間目でふしづくりをしたリズムの一部を変化させてつくる。新しいリズムをつくりたい児童は自分なりのリズムをつくってよい。 ◇教師がつくったリズムを提示する。 ☆学習カード②〈学習状況の把握〉 ・すぐにリズムがつくれた。→　つくったリズムを発表する。いくつかつくる。 ・リズムがつくれない。→　教師がヒントを与えたり、いっしょにつくったりする。 ◇４音は何回も使ってよい。最後はラで終わるようにする。 ◇木琴は、立奏木琴・卓上木琴・オルフ木琴の３種類用意し、児童に合わせて振り分ける。　〈個に応じた楽器の振り分け〉 ◇ペアの友だちと聴き合いながらふしづくりをしたり、練習したりするよう助言する。〈学び合いの場の設定〉 ☆ふしづくりの方法の提示〈学習状況に応じた手だて〉 ・自分なりのふしをすぐにつくることができる。拍の流れにのり、木琴で演奏できる。→ いくつかつくってみよう ・音を変える。 ・リズムを変える。 ・音・リズムを変える。 １６拍つくろう みんなの前で発表しよう ・ふしづくりができない。→ わらべうたづくりカードでつくってみよう わらべうたの構成音表のカードを使ってつくるよう助言する。 ・音をどうあてはめてよいかわからない。→ 友達のつくったものを聴いてみよう ・つくりたいふしのイメージがあるが、音程がわからない。→ 歌いながらつくってみよう ◆（イ）① ◇拍の流れにのってリズム打ちできるよう、木琴の伴奏を合わせる。 ◇つくったふしを聴き合って、お互いの表現のよさを感じるようにする。
【第３次】拍の流れにのり、つくったふしを演奏して楽しむ。		
	○つくったふしと歌をつなげて演奏する。 ・つくったふしを４人ずつつなげる練習をする。 ・「うちのうらのくろねこが」を全員で歌う。 ・つくったふしを４人ずつ歌につなげて発表する。 ・友達のふしのよいところについて発表する。	◇拍の流れにのり、つなげて演奏できるよう助言する。 ◇拍の流れにのれるように、４人のふしの間に歌「うちのうらのくろねこが」をはさむようにする。 ◆（ウ）①（エ）② ◇わらべうたの感じがでていたふしについて発言するよう助言する。

6　考察

(1)　児童が自ら課題をもって主体的活動をするための工夫について

ア　わらべうたに関心をもち、意欲的にふしづくりをするための導入の工夫

初めにわらべうたメドレーの鑑賞や歌遊びをしてわらべうたに親しむ活動を行い、特徴をつかんでからふしづくりに取り組むように指導計画を立てた。その結果、意欲的にわらべうた風のふしづくりに取り組むことができた。

イ　初めてのふしづくりが無理なく行える学習過程の工夫

ふしづくりは初めての活動だったので、全員が自分なりのふしをつくることができたという喜びをもてるように、ふしのつくり方が明確にわかるような学習過程を工夫した。初めは教師が提示した簡単な８拍のリズムに音を当てはめる方法で、始めと終わりの音や使う音を限定し、その音にシールを貼った木琴を用意して、どの児童も主体的に取り組めるようにした。そして、次の段階ではその児童なりの自由な発想や方法が生かせるように、リズムを変えたり使う音の数を増やしたり、児童の学び合いの場を設定して、ふしづくりに対する意欲を持続させることができた。

(2)　学習形態や学習コースの工夫

ア　ペア学習や学び合いの場の設定

ふしは一人ずつつくるが、ペアで一台の木琴を使用することにより、お互いに聴き合ったりアドバイスし合ったりして、学び合いながら活動することができた。また、ペア以外にも他の友達のつくったふしを聴き合う場を設けることにより、友達がつくったふしのよさを感じ取り、自分のふしづくりにも生かしていこうとする場面が見られた。

イ　ふしづくりにおける個人差への対応

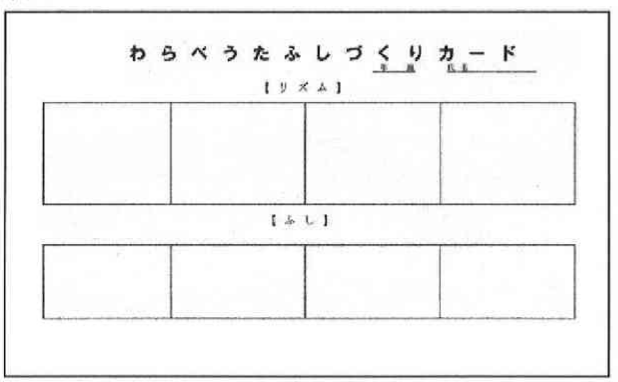
能力や様々な経験などの実態を踏まえ、ふしをつくるための３種類の方法を提示した。これにより、児童は自分のやりたい方法で確実にふしづくりに取り組むことができ、題材のねらいを達成することができた。

(3)　学習状況の把握と評価の工夫

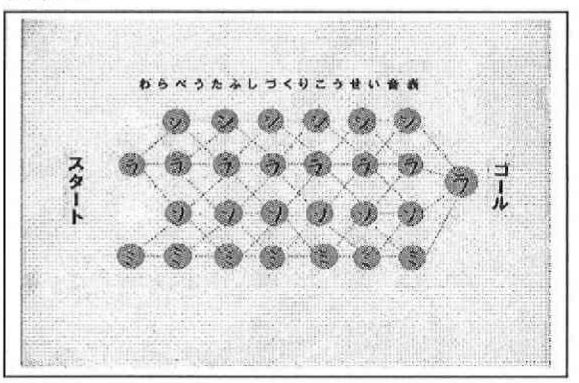
ア　ふしづくりカードの活用

全員が取り組むもの（資料１）や、選んで使うヒントカード（資料２）のようなものなど、学習過程に応じて様々な学習カードを用意した。これらのカードの活用により、児童は課題をはっきりもち、活動を振り返ることができた。また、教師は児童の考えやつまずきを知るなど、一人一人の学習状況を把握し、適切な支援をすることができた。

資料１



資料２



Ⅳ　研究の成果と課題

研究主題「音楽活動の基礎的な能力を培い、児童一人一人が成就感や感動を実感できる個に応じた指導に関する研究」に迫るために、児童の学びを支える手だてとして、個に応じた指導に着目し研究を進めてきた。本研究では、児童一人一人の個性や個人差をとらえ、個に応じた指導の工夫をすることによって、音楽科の基礎的な能力を身に付けさせるとともに、音楽を表現する喜びや成就感を味わわせたいと考え、実践してきた。

1　研究の成果

・教師が、教材の魅力を引き出すような課題提示や発問を工夫することによって、児童は、音楽活動への願いをもち、自ら課題をつかんで主体的に活動することができた。

・児童一人一人の個性や実態を把握し、それに対応した学習コースや学習方法を提示したことにより、めあてに向かって自分にふさわしい方法で、主体的に活動する姿が見られた。また、様々な学び合いの場を意図的に設定することによって、児童が互いに聴き合ったり教え合ったりして、個の学びを深めることができた。

・学習カードの活用によって、①児童の主体的な活動を促すこと②教師が児童の実態を把握し、次の指導に生かすこと③児童と教師のコミュニケーションを図ることができ、児童の次の活動への意欲を高め、集団における学習の中で、個に応じた指導に迫ることができた。

・児童が互いに発表し合い、教師がそれに対して音楽的な価値付けをすることで、児童同士が学びを共有し学習を深めることができた。

2　今後の課題

音楽科は、集団で音楽を創造したり演奏したりする楽しさを味わい、その中で一人一人の豊かな人間性をはぐくんでいく教科である。その特性を十分に生かしながら、個に応じた指導を展開するための手だてを探ろうと研究開発を進めてきた。今後の課題として次のことがあげられる。

・児童一人一人がめあてをもち、自分にふさわしい方法で、音楽の基礎的な能力を身に付けていくことができるように、学習過程に対応した学習形態や学習カード等をさらに工夫することが必要である。

・児童一人一人が、ねらいに即した課題を確実にもつことができるように、題材設定や指導計画をさらに工夫していくことが必要である。

・音楽の授業は、音楽専科の教師が一人で受け持つ場合がほとんどである。集団の中での個に応じた指導を実現するために、これまでの研究開発で検証した方法の他に、地域人材の活用、異学年合同授業等、有効な手だてを探っていく必要がある。

児童は、集団の中で音楽活動の成就感や感動を味わいながら、様々な能力を身に付けている。それを教師が的確に把握できる目をもてるように、さらに研究を深めていく必要がある。